

〒651-0073神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
Phone:078-262-0901
<https://www.artm.pref.hyogo.jp/>

学芸員の視点 新収蔵品を囲む会 — 2023年度コレクション展Ⅱ「Welcome! 新収蔵品歓迎会」 — 林 優	28
特別寄稿 金山平三展の会場で考えたこと — 木下直之	46
ショート・エッセイ 金山平三のアルバム — 当麻さくら	6
トピックス 2023年コレクション展Ⅰ関連事業 金山展関連事業を開催しました。 「2023県展」を開催しました	7
美術館の周縁 片町線 — 相良周作	8

ARTRAMBLE

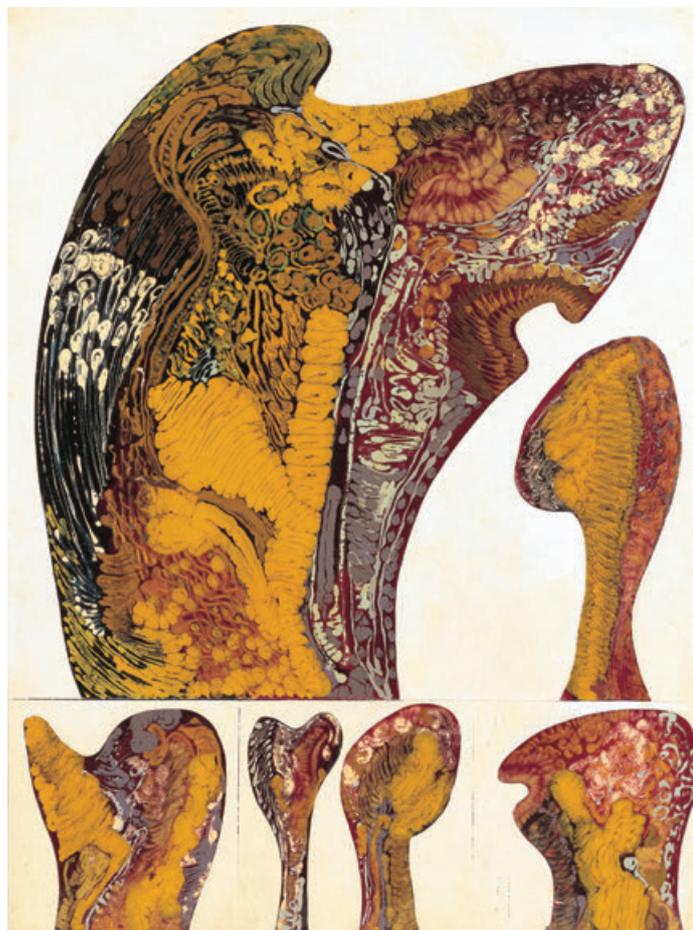
どこか生きものめいたかたちが大小並んでいます。輪郭の内側には色の線やにじみが、うねうねと複雑な模様をなしつつ連なっています。どうやって描いたのか、詳細は不明ながら、画面にのせた塗料をバーナーであぶっていたという証言も残されています。丸本耕は、この自称「エナメル燃やし」による作品を、1964～67（昭和39～42）年頃に多数制作しています。67年、椿近代画廊（東京）での個展では、今で言うインスタレーションのように、床から天井まで壁全体をさまざまなサイズの平面作品で埋め、床にも平面や立体のパーツを所狭しと並べました。本作は後

年に壁面の一部を独立した画面にしたものです。

コレクションから

現在、丸本耕の名は、それほど知られていませんが、戦後神戸の美術界で存在感を示した作家で、特に60年代には京都国立近代美術館の「現代美術の動向—絵画と彫塑—」展（1964年）に選出されるなど、広く注目を集めました。また、50年代に詩人の明子夫人とともに元町商店街で経営していたDONという名の画廊喫茶には、神戸の美術関係者が党派を超えて集い、文化的交流の場となっていたようです。

（江上ゆか／当館学芸員）



丸本耕(1923—2014)
《作品》
1966(昭和41)年
合成樹脂塗料・板
121.2×91.0cm
令和4年度 丸本純氏寄贈

新収蔵品を囲む会 — 2023年度コレクション展Ⅱ「Welcome ! 新収蔵品歓迎会」 林 優

筆者がそれまで勤務していた横尾忠則現代美術館（兵庫県立美術館分館）から異動して2年半が過ぎた。開館から11年、現役のアーティストである横尾の尽さないエネルギーに翻弄されながら、アクロバティックに走り続けてきた横尾忠則現代美術館がある種のベンチャー企業だとすれば、1970年、全国二番目となる公立の近代美術館として開館し、「アート・ナウ」や「美術の中のかたち」展といった名物シリーズを生み出し、長きにわたる収集の成果として13,000点以上の作品・資料を収蔵する兵庫県立美術館は、筆者にとって老舗の本店である。このたびコレクション展を担当することになり思い知ったのは、その収蔵品の膨大さと歴史の厚みであった。それまで横尾忠則という一人の美術家のブラックホールのような作品世界を、深みにはまるように掘り下げてきた筆者にとって、近代から現代にかけての、バラエティに富んだ作家や作品を扱うことは新鮮であり、苦心させられた部分でもあった。

今回のコレクション展の主なミッションは二つ。一つは、昨年度（一部、一昨年度分を含む）新たに当館のコレクションに加わった「新収蔵品」をお披露目する展覧会であること。もう一つは、同時開催の特別展「Perfume COSTUME MUSEUM」（～11月26日まで、以下「Perfume」展）の鑑賞者に、コレクション展にも足を向けてもらえる工夫を考えることである。

令和4年度は79点の作品・資料を収蔵した（いずれも寄贈による）。昨年度開催した「関西の80年代」展をはじめ、「美術の中のかたち」展、「チャンネル」展など、過去に当館で開催した企画展の出品作を収蔵できたことは喜ばしい。また、長きにわたりご支援いただいている公益財団法人伊藤文化財団からは、今年も岡田三郎助、菱田春草、ダヴィド・ブルリ्यूク、小出楯重、恩地孝四郎、東山魁夷、ケネス・アーミテイジによる8点の作品を寄贈いただいた。さらに今回、木村重信元館長の旧蔵品で、生前の交流を示す須田剋太、三尾公三などの版画作品等もコレクションに加わっている。例年、コレクション展は「特集」と冠して、特定のテーマを設ける形で展覧会を構成しているが、洋画から版画、彫刻、映像作品まで、時代もジャンルも多岐にわたるこれらの新収蔵品から共通点を見だし、一つのテーマのもとにまとめるのは至難の業に思われた。むしろ、様々な出自を持つ作品たちが、縁あって一つ屋根の下につどい、横に並んで展示される（近代）美術館ならではのシチュエーション自体を前景化してはどうかと思ひ立ち、新収蔵品を各地から大学にやってきた新入生にたとえて、その新歓パーティーを開催する、という設定を考えてみた。各サークルに分かれた新入生は、そこで先輩たる既存の収蔵品と出会い、交流する。同時開催の「Perfume」展とあわせて、祝祭的なムードを演出すべく、タイト

ルは「Welcome ! 新収蔵品歓迎会」とした。

展覧会のプロローグ「勧誘—どこかで会ったことある？」では、新旧の収蔵品同士の出会いから浮かび上がる接点やつながりに焦点を当てた。丸本耕は戦後関西で活躍した作家で、50年代に神戸・元町で経営していた「喫茶DON」は、洋画家の鴨居玲や中西勝が通い、評論家の瀬木慎一の座談会が開かれ、具体美術協会（具体）の上前智祐が個展を開催するなど、関西の文化関係者の交流の場となっていたことが知られている。60年代半ば、合成樹脂を垂らしたキャンバスをバーナーであぶって模様をつけた「エナメル燃やし」と呼ばれる技法で制作された一連の作品は、具体のメンバーとして活躍した元永定正（丸本より一歳年上）が、日本画の「たらしこみ」に想を得て制作した作品と、形態や手法の面で共通する点が感じられる。さらに筆者にとって興味深かったのは、デザイナー・横尾忠則誕生をめぐるエピソードに「喫茶DON」が関係していることである。1956年、神戸新聞にカット投稿をしていた若き日の横尾は、投稿常連者たちと「きりん会」というグループを組んで展覧会を開く。そのとき展示したポスターがデザイナーの灘本唯人の目に留まり、神戸新聞宣伝技術研究所に入社することになるのだが、その展覧会の会場が、他ならぬ「喫茶DON」だったのである。今回の収蔵は、戦後神戸の美術をめぐる状況を知る上でも重要となるに違いない。

次章「コスチューム研究会」では、同時開催の「Perfume」展と連動する形で、美術作品における衣服の扱いに着目した。衣服とは単に暑さ寒さをしのぐためにまとう布である以上に、時代や地域、文化との関わりの中で社会的な意味や役割を担うものである。澤田知子による写真シリーズ《Costume》（2003年）は、保育士や看護師、警察官といった人物を、その職業をあらわす服装と場面設定のもとで澤田自身が演じるセルフポートレートである。本展のメインヴィジュアルでもある《Costume/OKAMI》を見ると、三つ指をついてにこやかに微笑みかける着物姿の女将はいかにもそれらしいが、それはリアルな女将の姿というよりも、私たちが無意識のうちに女将という職業に投影しているステレオタイプに近い。エプロンを付けた優しいそうな保育士も、取り締まり中のいかめしい顔の警察官も、すべて同一人物であるにも関わらず、まるで別の内面を持っているように思えるのは、私たちが服装によっていかに無自覚にその職業と人格とを結びつけているかということの裏返しでもあるのだろう。翻ってそれゆえに、「Perfume」の衣装も、楽曲の世界観やメンバーの個性、ユニットとしての属性を、効果的に演出するための重要なアイテムとなり得るのだ。

もう一つ、重要な新収蔵品として、小出楯重《芸術家の家族》（1919年）



常設展示室 1



常設展示室 5 (東側)

学芸員の視点

を紹介しておきたい。樗牛賞を受賞した出世作《Nの家族》（大原美術館蔵）の直前に制作されたとされる本作は、和服姿の自身とその妻子というモチーフをほぼ同じ構図で描いたものだが、テーブル上の静物や背景の描写に違いがあり、画面構成の模索が見受けられる。単なる習作とは位置付けがたい、独自の魅力と完成度を持った作品である。

人体をモチーフとした作品を集めた「身体研究会」では、ケネス・アーミテイジの彫刻を挙げておく。ブロンズによる人体彫刻を手がけてきたイギリスの彫刻家アーミテイジは、1960年代後半からアルミニウム鍍金に白い彩色とグラフィカルな線描を施した作品に取り組んでいるが、今回コレクションに加わった《縞模様のスカートの少女》（1974年）もその一つである。操り人形のようにごごちない、一方で軽やかさや浮遊感を感じさせる人体表現は同時期の版画作品にも共通しており、会場では両者を組み合わせ展示した。

「風景愛好会」は文字どおり風景を題材とした作品の集まり。ロシア未来派の中心的な作家で、ロシア革命による内戦から逃れて1920年に来日したダヴィド・ブルリ्यूクが、滞在中に描いた風景画2点を収蔵した。いずれも小品だが、うち1点の《西須磨海岸》（1921年）は、神戸の須磨海岸から淡路島方面を描いたもの。地形の特徴を捉えた写実的な空間構成とは対照的に、漁船が並ぶ砂浜は幾何学的に分割され、非再現的な色彩が並置されるなど、未来派的な表現を垣間見ることができる。林勇氣《landscape》（2009年）は、インターネット検索によって集められた「風景」の画像を素材とした映像作品。ひとたびインターネットにアクセスすれば、そこには世界中の誰かによって保存され、共有された無数の画像データが蓄積されている。林はそこから採取した画像を切り抜き、仮想空間を漂うオブジェとして用いることで、画面の向こう側にあるもう一つの世界を詩情豊かに可視化する。

「休部—ただいま不在中」では、新収蔵品を「不在」というキーワードでつないだ。北山善夫の《歴史は死者がつくった》（2000-09年、前期展示）は、約10年の年月をかけて制作された大作。画面を埋め尽くすおびただしい数の人間は、北山自身が粘土で作った人形を紙にペンで克明に描き続けたものである。今はいない無数の死者たちの集積と、その大きな歴史の流れの中に、現在の私たちの生があることを思い起こさせる。

彫刻作品を展示することの多い常設展示室5では、「美術の中のかたち同窓会」と題して、今年で33回目を迎える当館の恒例企画「美術の中のかたち」展に出品された収蔵作品の中から、登場回数が多い作品を中心に構成した（ちなみに最も出番が多かったのは、オーギュスト・ロダンの《瘻

する大きな手》）。同時期に常設展示室の一部を使って開催している「美術の中のかたち一手で見る造形 逸藤薫 眼と球」展へバトンをつなぐ形である。

続く「体験入部」には、当たり前と思われているもの・ことに手を加えることで、新たな鑑賞体験を提示する作品を展示した。国谷隆志《Untitled (Stele I)》（2015年）は、2015年に当館で開催した「チャンネル6 国谷隆志 Deep Projection」展の出品作。スチール製の台の上に置かれたネオン管がやわらかな光を放つこの作品は、チャンネル展の際は吹き抜けの階段ホールに展示され、3階の回廊、階段、1階と様々な角度からの鑑賞が可能であった。空間への動きかけを作品の一部とする国谷ならではの展示だが、スペースに限りのある今回のコレクション展では、美術館入口に続くアプローチに面した常設展示室5の東側の空間を利用することにした。ここは外壁がガラス面となっているので、発光するネオンの光が通行する来館者の目に留まるのではないかと考えたからである。会期中には、通り過ぎる人の多くがガラス越しに展示室内を一瞥しているのを見かけた。正体が気になって、展覧会に足を運んでくれた人が少しでもいてくれればうれしいのだが。

「須田剋太交流会」では、木村重信元館長旧蔵品に加わった須田剋太の作品を中心に、戦後関西におけるジャンルを越えた交流を紹介した。長谷川三郎との出会いをきっかけに抽象画を手がけはじめた須田は、吉原治良、津高和らと交流する一方、森田子龍編集の雑誌『書之美』『墨美』に寄稿するなど、前衛書家たちとも密接な関係を築いた。1952年に発起人として参加した「現代美術懇談会」（通称ゲンビ）では、絵画、彫刻、書、工芸、いけばななど様々なジャンルの作家たちが集まり、ディスカッションや展覧会が繰り広げられている。また同時期には、書と抽象絵画の関係をめぐる議論が活発化するのだが、その点については、来年3月から開催予定の特別展「スーラージュと森田子龍」をぜひご覧いただきたい。

以上、展覧会の構成と新収蔵品について概観した。紙数に限りがあり紹介しきれなかったものも多数ある。また、コレクション展にあわせて、小磯良平・金山平三両記念室も「小磯良平主宰コスチューム同好会」「金山平三主宰ボージング&コスチューム同好会」と題して関連展示を行ったことも書き記しておく。毎度のことながら、多くの方々の協力によって無事展覧会が開催できたことをありがたく思う。展覧会初日はちょうど筆者の誕生日にあたり、新収蔵品を囲んで、という訳にはいかなかったが、自宅でひっそり、祝杯をあげた。

（はやし・ゆう／当館学芸員）

金山平三展の会場で 考えたこと

木下直之



展覧会入口(筆者撮影)

金山平三という画家の名前を知ったのは1980年だと断言できる。この年の秋に、私は兵庫県立美術館の前身である兵庫県立近代美術館に就職し(最初の半年はアルバイトだったが)、画家の妻から絵をもらったことで兵庫県が美術館を建てたのだと知って驚いた。それも130点の絵と資料という結構な数だ(最終的には約520点に及んだ)。1964年に金山が亡くなり、66年に遺作・遺品が県に寄贈され、美術館の開館が70年だから、わずか10年前の出来事だったはずなのに、すでに世の中には美術館が当たり前のよう存在し、だからこそ私はそこで働きたいと望んだわけで、美術館がどのように生まれるかだなんて考えたこともなかった。

それから43年が過ぎた今となっては、美術館の誕生にはそれぞれに背景があること、いわば「産みの苦しみ」が理解できる(私も大人になったものだ)。兵庫県よりもずっと遅れて美術館建設を志した静岡県は、当初、県立美術博物館を構想し、まず旧正倉院文書2点を含む国学者小杉禎郎こすぎのぶらう旧蔵の書画・古文書類347点(小杉文庫)の購入から始めたものの、「博物」が外れて1986年に開館、近世・近代美術を視野に収めた美術館として歩んできた。

金山平三コレクションに端を発した兵庫県立近代美術館が、2002年になって「近代」を外し、2019年に颯川美術館コレクションと梅舒適コレクションを受け入れることで、名実ともに近代美術館ではなくなったことを思い浮かべると、全国の公立美術館が金太郎飴を切ったように見えた時代もあったものの、それぞれの成長過程で、独自の体質や性格を作り上げたことがわかる。

さて、そのようにして私が金山平三の名前を知ったとしても、肝心の金山平三を知ったのはいつだろうか。そんなことを考えながら、このたびの展覧会場を歩き回った。というのは、知らない金山平三がつぎつぎと姿を現すような気がして、とても新鮮だったからだ。たとえば、晩年にアトリエを撮った写真に、若いころにパリで描いた男性ヌードの習作が映っていた。何度も目にして来た写真のはずなのに、金山がその絵をそれほど大切にしていたということを見逃していた(私も男性裸体像がやたらと気になる大人になったものだ)。すると、金山は男性像にどう取り組んだのかという関心が俄かに湧き起こった。

兵庫県立近代美術館での最初の金山平三展は、開館の翌年(1971年)、意外なことに「全芝居絵展」だった。なぜそうなのかは知らないが、新宿小田急百貨店からの巡回という形をとった。ようやく1983年になって、生誕100年を記念し、その足跡を振り返る「金山平三展」が開催された。図録を開いてみると、驚くべきことに、就職3年目の私が「展覧会歴」と「参考文献」をまとめていた(すっかり忘れていた)。増田洋館長補佐が「金

山平三の人と芸術」を書き、画家の小磯良平が「金山さんのことども」を、歌人の飛松實が「人と作品」を寄稿している。担当学芸員の私は、この時にじっくりと金山の絵と向き合ったはずだ。

それから11年後(1994年)、今度は没後30年を記念して「金山平三展」が開かれた。これまた就職3年目の西田桐子学芸員と組んで、ゼロから企画したことをよく覚えている。従来の金山平三像にとらわれないことを心がけた。そう考えたのは、生誕100年展と没後30年展との間に、金山の遺品(スケッチブック、日記、絵葉書、写真、人形など)の整理・調査・研究が進んだからだ(夏休みに博物館実習の学生たちと取り組んだ整理作業が懐かしい)。

展覧会は第1部「旅する画家」、第2部「知られざる金山平三」から成り、後者では「神戸」、「東京美術学校」、「模写・スクラップブック」、「パリ」、「絵葉書」、「帝展」、「アトリエ」、「群像」、「父の像」、「スケッチブック」、「捧猿座」、「芝居と芝居絵」、「人形」、「絵皿・ミニアチュール」、「大石田」、「港町」、「らく夫人」というテーマを設定した。

図録「ごあいさつ」の次の一節は、間違いなく私が書いた。

「作品を通して厳しい制作態度は伝わってくるものの、それは金山平三の一面にすぎません。ひょうきんで茶目っ気にあふれ、暇さえあれば人形を作り、芝居と踊りを愛し、自らも演じた多彩な側面が、やがて忘れられてしまいます。本展では、亡くなるまで手放さなかった手作りの人形や、留学時代の絵葉書コレクション、芝居に興じる写真アルバムなどを合わせて、東館2階の金山平三記念室に展示し、画家金山平三のみならず、人間金山平三をも紹介することにしました」

生誕100年展の図録「ごあいさつ」(おそらく増田洋館長補佐の執筆)が、以下のとおり「画家金山平三」を前面に打ち出したことへの対抗意識があったのだろう。

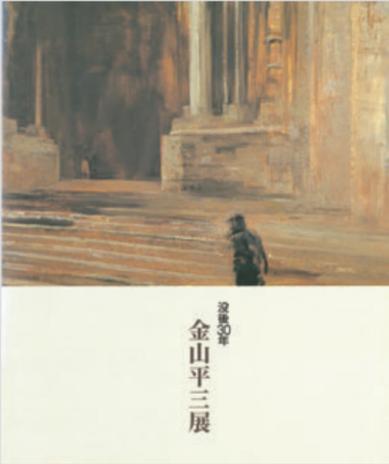
「日本の自然を、透徹した表現と豊かな色彩のハーモニーによって描き、珠玉の名作を多数残しています。若くから優れた才能を発揮し、文展では連続して特選を受賞、また帝展では第一回展から審査員を務めるなど注目されました。しかし、帝展改組を機会に画壇との関係を絶ち、日本各地を旅行、孤高の画家生活を送りました。旅行から生まれた作品を世間に公表することが少なく、そのため優れた画業に比べて名前は余り知られませんでした。今日、その芸術への関心が急速に高まってまいりました」



金山平三(習作(男裸像))1913年頃



金山平三アトリエ



「没後30年 金山平三展」図録 1994年

特別寄稿

そのころの私は、東京美術学校一文展一帝展一そこからの離脱一孤高の画家というように、画家を直線的に捉えることに辟易していた。美術館学芸員なのに、美術離れが始まっていた。1990年に「日本美術の19世紀展」を企画し(兵庫県立近代美術館の開館20周年記念)、その成果を『美術という見世物』(平凡社、1993年)と題して上梓したのが没後30年展の前年だった。

近代よりも近世の大坂に目が向かった。美術作品よりも祭礼や見世物の作り物、恒久的・永続的な造形表現よりも一過性・その場限りのもの、彫刻よりも人形を追いかけ(とはいえ収蔵庫に眠る金山手作りの人形は何とも捉えどころがなかった)、それゆえに金山の踊りにすっかり魅せられた。その結果、「描くだけじゃ物足りぬ!金山平三の“アトリエ芝居”」(『芸術新潮』1994年11月号)を書いてしまったほどだ(拙著『世の途中から隠されていること』晶文社、2002年所収)。とりわけ、夏祭浪花鑑の殺す団七と殺される義平次をひとりで演じた一連の写真は鬼気迫り、その撮影には相当な手間がかかったはずで、フランス帰りの洋画家というイメージを簡単にひっくり返してくれる。小文を読み返したら、金山をよく知る芸者(1885年生まれの今井キミ)のこんな言葉を引いていた。貴重な証言だと思うので、再録しておこう。

「絵ばっかしかいていて、そのあい間に踊りおどったりして。フランスへ勉強に行きはった偉い人ですけど、実は、あんまりええ男前やなかった」

そんなわけで、このたびの展覧会場入口で、踊る金山平三に迎えられたことは、躍り上がるほど嬉しかった。もっとも、そこには何の説明もなかったから、金山の芝居好き・踊り好きを知らない来館者は、この爺さんはいったい誰なのかと思ったに違いない。

その後、兵庫県立近代美術館は兵庫県立美術館となり、2012年に「日本の印象派・金山平三展」が開かれ、ひろしま美術館に巡回した。「日本の印象派」というレッテルはそれ以前から使われていたが、はっきりとタイトルに掲げたことは本展の特徴だろう。残念ながら、私はそれを見ていない。しかし、いくら金山が印象派が好きだったとはいえ、本場での印象派という呼称が歴史的産物である以上、時空を超えたレッテルの再生産には疑問なしとしない。

それから11年が過ぎて、このたびの「日本近代洋画の巨匠 金山平三と同時代の画家たち展」となる。私にとっては、29年ぶりの金山平三展、29年前には「知られざる金山平三」という展示を組んだ人間の前に、先にふれたとおり、「知らない金山平三がつぎつぎと姿を現す」とはいかな

ることか。男性裸体像と日清戦争図の前で足が止まった理由ははっきりしている。この29年間に、私の関心が男性裸体像と日清戦争に向かうようになったからだ(拙著『股間若衆』新潮社、2012年および『戦争という見世物』ミネルヴァ書房、2013年をご覧ください)。

「同時代の画家」として、満谷国四郎、柚木久太、児島虎次郎、新井完、須田国太郎の絵と一緒に並んだことは、これまでの金山展にはない新たな試みだった。金山は友人たちの似顔人形を作っており、少なくとも柚木のそれにはわかにかに血が通ったような気がしたが、残念ながら人形は展示されていなかった。

男性裸体像はわずか3点、着衣像も含めて人間を大きく扱うことは少ない。得意ではなかった。たぶん、それは動かない人間像を好まなかったのであり、風景の中で、あるいは舞台上で動き回る人間は無数に描いた。没後30年展図録の表紙の人物もそのひとり。それほど描き込まない。不動より運動、身振りや仕草を捉えることに長けている。須田国太郎の芝居絵との比較は本展の大きな見どころだった。

そうであれば、典型的な不動像たる裸体モデルを描いた習作をなぜ晩年に至るまでアトリエに掛け続けたのだろうか。お粗末な落ちをひとつ。没後30年展の図録99頁「アトリエ」の欄にも、この写真が載っている。そこに添えられた「アトリエの金山平三夫妻、壁に画学生時代の男性裸体像が掛かっている」という解説も私が書いたに違いない。それが「掛かっている」ことの意味にまで思い至らず、事実を指摘しただけでそのまま忘れていた。

もし、金山平三の絵がまとめて寄贈されなければ、どうなっただろうか。兵庫県は別のやり方で美術館を建てたろうし、そうなれば今とは違う兵庫県立美術館となったはずだ。他方、金山の絵は四散し、絵を一堂に会して画家の足跡を振り返ることは困難を極めるだろう。美術館が金山平三という画家を歴史へと送り込んだことは間違いない。ところが、それを見るこちらはまだ生きている。少しは成長したかもしれないが、歳をとり、物忘れも多くなった。人生の時々で、そもそも会ったこともない金山平三という画家と向き合ってきた。展覧会とはそういう機会を与えてくれる場なのだと思つづく思った。

(きのした・なおゆき／静岡県立美術館長・東京大学名誉教授)

略歴

1954年生まれ。東京藝術大学大学院中退。1981年から1997年まで兵庫県立近代美術館学芸員。東京大学総合研究博物館、東京大学文化資源学研究室教授を経て、2017年より現職。『美術という見世物』(1993年、サントリー学芸賞)をはじめ、『動物園巡礼』(2018年)など著書多数。2015年、紫綬褒章受章。

金山平三のアルバム 当麻さくら

2023年度の特別展「ある画家の肖像 金山平三 ショート・エッセイ

2023年度の特別展「ある画家の肖像 金山平三」と同時代の画家たちでは、金山平三と夫人らくが遺した写真・絵葉書アルバムや日記等も展示された。

これらは平三の滞欧時代とその後の夫妻の人生を読み解く上で欠かせない資料の一部であり、絵画と並んで保存の対象である。資料の多くは、オリジナルの素材・構造の保存性の悪さや取扱いに起因する損傷がみられ、展示や調査の際にはこれ以上劣化が進行しないよう予防的・場合によっては介入的処置を行うのも、当館保存修復担当の仕事となる。

まずは、資料の歴史的背景、物性を調査し、状態を分析する。ここで気がつくのが、金山平三の資料群が、夫妻の元に集まったフランスと日本におけるステーションナリー・バインディングのコレクションでもある点だ¹。ステーションナリー・バインディングとは、帳簿や日記帳など「書くための本」、つまり文具・事務用品を扱う製本分野で、アルバム類もこれに含まれる²。金山平三は、滞欧時代（1912-1915）に大量の絵葉書を収集した³。観光地では民族衣装を着て今で言う「なりきりフォト」を撮り、日本に帰ってからは、らくのカメラ趣味と相まって、踊りの衣装を着けたコマ撮り写真などもある（特別展期間中、大階段の3階入口には踊る平三の写真パネルが設置されていた）。それらを収納したアルバムの山！

金山平三が生まれ育った19世紀後半から20世紀初頭は、写真・印刷・製本・流通など産業革命以降のあらゆる技術の発達を背景に、様々な紙ベースの「記念品」収集が趣味として広まった時代だった。各需要に合うように構造やマウント方法に工夫を凝らしたアルバム類が登場した。ヨーロッパでも、洋式製本が主流になってゆく日本でも、製本工程の機械化が進みつつ、まだ職人の手作業が残る過渡期でもあった。平三の資料には、そんな時代背景を反映したバラエティに富む製本様式がみられる。その中から、二点例を挙げてみよう⁴。

1 Roberts, Matt T., Don Etherington. "Stationery Binding." *Bookbinding and the Conservation of Books A Dictionary of Descriptive Terminology*. <https://cool.culturalheritage.org/don>

2 Rutherford, Jane. "Victorian Album Structures." *The Paper Conservator*, vol. 23, no. 1, London, ICON, 1999, p. 14.

3 吉田朋子「金山平三の絵葉書コレクション調査報告—滞欧期(1912~1915)の検討とともに」『兵庫県立美術館紀要』第5号、2011年、4-19頁。

4 2の資料については2023年国立西洋美術館「モネ、ゴーガン、黒田清輝らが見た異郷 憧憬の地 プルターニュ展」に貸出。

1. 赤い布表紙が印象的な大判のスクラップブック

表紙に金色箔で「MES VOYAGES(私の旅)」。タイトル通り、平三が滞欧時代に集めたチケット・パンフレット類が貼り付けられている。製本に関する一番の見所は、厚くて硬い本文紙でも180度容易に開くようノド側⁵にヒンジ⁶を付けた構造である。このような工夫はアルバム製本のスタイルの一つで、キャビネ判写真を台紙の間のポケットに挿入するタイプのアルバム等にもみられた⁷。この資料の場合は、糸綴じではなく、それぞれ谷折り・山折りにしたノド側と台紙側の厚紙が、布製ヒンジを挟むように接着していくことで本体を形成している（図1）。

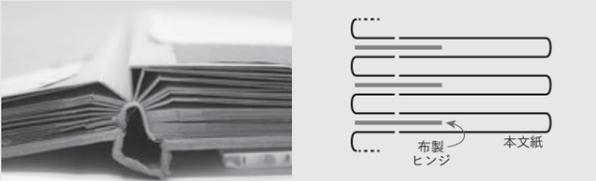


図1 綴じの構造の断面図

2. 絵葉書アルバム

プルターニュ地方を中心に202点の観光絵葉書が収納されている。表装は背と角に深緑の革、金色箔でタイトル「Cartes Postales」とある。本文紙は暗色の厚紙。絵葉書の角を差し込んで収納するためのスリットが開けられている。絵葉書の厚みを補うため、蛇腹に折った「枕」を本文の折丁と重ねて糸綴じ（図2）。1900-1920年頃に最も普及した典型的な絵葉書用アルバムの構造⁸。なお、平三の資料にはクロス装の日本製絵葉書アルバムも存在する。劣化して柔軟性を失った本文紙が開閉を難しくしている点は共通の致命傷だが、同じ様式でも枕の構造や素材が少しずつ違って興味深い。

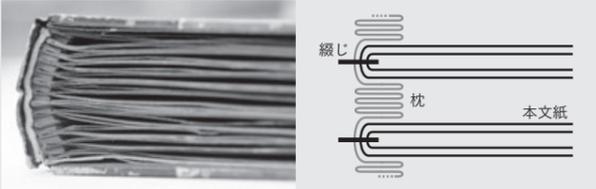


図2

金山平三のアルバム達は、収納物とその収納順序、レイアウトからも夫妻とその時代について様々なストーリーを語ってくれる。同時に、製本そのものが示す歴史的背景や、三次元の構造物としての面白さも見逃せない。硬い本文紙と布を接着していたり、枕があったりと、特殊な構造ゆえに保存性に問題のあるものが多いのだが、できる限りオリジナルのフォーマットのまま保存するために、素材・構造・開閉時の力のかかり方についての理解は基本となる。ところで、アルバム類の綴じの構造は天地の小口から観察するとわかりやすい。次の展示の際には、文字通り違った一面を覗いてみるのもお勧めの鑑賞法です。

（とうま・さくら／当館県政推進員・保存修復担当）

5 見開きの中央部分。綴じ側。

6 蝶番。この場合、鬆いだ二つのパーツが自由に開閉するよう取り付けられた布または紙の帯。

7 Wootton, Mary., Boone, Terry., Robb, Andrew. "The Structure's the Thing! Problems in the Repair of Nineteenth-Century Stiff-Paged Photograph Albums." *Conservation of scrapbooks and albums*, Washington,AIC, 2000, pp.37-44.

8 Horton, Richard W. "Glossary of terms relating to photo albums." *Ibid.*, p.24.

2023年コレクション展 I 関連事業

2023年1月21日(土) から7月23日(日)まで開催した2023年コレクション展Iの関連事業の内容を振り返ります（特集2の関連事業については本誌78号をご覧ください）。

特集1「虚実のあわい」関連のこどものイベントとして、「美術館探偵コレクション展Iを調査せよ!」を5月27日(土)に開催しました。このイベントは、参加することも達も我々スタッフも作品を調査する「探偵」になりきるという趣向。こども達は紙製のルーペを片手に展示室に赴き、謎解き形式の「調査報告書」に沿って作品を鑑賞します。展示室でのミッションの後、別室でそれぞれの調査内容を報告し合いました。この他に特集1では、2月18日(土)、4月9日(日)、5月20日(土)に「学芸員による解説会」を、また7月11日(火)には「ひょうごプレミアム芸術デー」関連で「手話通訳・要約筆記付き解説会」を開催しました。

後期(4月29日(土)ー7月23日(日))には、常設展示室6において「近現代の書」が始まりました。この関連事業として、6月24日(土)にこどものイベント「書の世界へようこそ!」を開催しました。イベントではまず会場で作品を鑑賞、次にこども達が実際に筆と墨を使って様々な書の表現方法を実験し、最後に再び会場に戻って作品鑑賞を行い、自分の体験をもとに新しく気づいたことを発表してもらいました。

こうしたコレクション展の関連事業を通じて、当館の所蔵品を身近に感じていただくことができれば嬉しいです。

（河田亜也子・剣持翔伍／当館学芸員）



左:「美術館探偵 コレクション展Iを調査せよ!」展示室での調査の様子



右:「書の世界へようこそ!」筆と墨を使った実験の様子

金山展関連事業を開催しました。

前身の県立近代美術館時代から通算5回目、前回の「日本の印象派 金山平三」展から11年ぶりの開催となった「ある画家の肖像 金山平三と同時代の画家たち」展。諸般の事情により約1年前の急ぎよ開催決定や展覧会の正式名称決定までの紆余曲折などいろいろとありましたが、いざ開催すると会期中の観覧料無料期間もあってか、約12,000名の来館者に鑑賞いただくことができました。

また関連事業も以下のとおり開催しました。まず記念講演会「金山平三が見つめた風景の地平線」では府中市美術館で実績の豊富な志賀秀孝氏のご登壇、金山は究極「何でも描けて何でも実現できた人」という、当代の文人画家とでも言えそうな結論に思わず留飲を下げました。また画家の津上みゆき氏と当館の林館長との対談「いまを生きる画家が語る金山平三」では、制作者の視点ならではの金山論の展開に会場が湧きました。こども

のイベント「美術館からの招待状 金山平三ってだれやねん!？」では、多くの参加者が金山作品の独自性に着目しながら熱心に鑑賞していました。その他担当学芸員による解説会や当館ミュージアム・ボランティアによるスライド解説会も実施しました。

（相良周作／当館学芸員）



記念講演会の様子

「いまを生きる画家が語る金山平三」会場風景

「2023県展」を開催しました

毎夏恒例、兵庫県の「県展」。60回目となる今年にはデザイン部門で「ひょうご」、「60」をテーマとする作品も募集、また応募時のWeb申込も導入しました。その甲斐あってか、昨年を大きく上回る598点の応募があり、厳正なる審査により入選した200点が、8月5日(土)から19日(土)まで県立美術館分館の原田の森ギャラリーに展示されました。各部門の一席から選ばれる県展大賞は写真部門の勝木俊典さんの《遠い記憶》に、来場者の投票による県民賞は絵画部門四席でもある椿野聖梨さんの《昼さがり》に決定しました。佳作を含めた入賞作品は50点です。

搬入や展示の作業には博物館実習の学生も参加、COVID-19の感染拡大以来久々に、実習生が展覧会の現場を体験する機会となりました。ミュージアム・ボランティアのみなさんも、やはり2020年以降途絶えていた県展での活動を再開、監視員として会場運営を支えていただきました。会期中には、台風による臨時休館もあり昨年には及ばなかったものの、2751名のお客さまがご来場くださりました。

（江上ゆか／当館学芸員）



「2023県展」会場風景

● 編集後記

● 7月23日まで開催した「ある画家の肖像 金山平三と同時代の画家たち」展について、異なる観点から執筆された文章が掲載されていますが、いずれも踊る金山が登場します。美術館、そして本紙が、金山の作品とその人物に何度も巡り合う機会となれば幸いです。

● メンテナンス休館が明けて、9月9日よりコレクション展と特別展が同時開幕しました。新収蔵品歓迎会にPerfume展、そして、コロナで休止されていたボランティアさんの活動も増えて、館内はにぎやかになっています。（橋本）

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.80

2023年10月27日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:有限会社リースワーク

片町線

相良周作



保存された路面電車（筆者撮影）

美術館の周縁

美術館学芸員の業務のひとつとして、「美術作品の調査」というのがある。作品が実際に所蔵されている場所に直接向かい、作品を実見するのである。美術館は展覧会を開くところなので展覧会企画にかかる出品交渉の一環として赴く。最近では11年ぶりに開催された金山展関連で名古屋や倉敷に向かった。一方で美術館には並行して作品を収蔵しコレクションを形成していく、という大きな役割があり、新たな作品収蔵のために調査を行う場合もある。この両者に技術的な差はないが、展覧会のための調査があくまでも一時的な借用目的で行われるのに対して、作品収蔵のための調査の場合は少し様相が異なる。

筆者はここ数年作品寄贈にかかるセクションを担当していたこともあって、展覧会のためにはない「作品調査」の名目で数回現場に赴く機会があった。そのうちのひとつについて、ここで触れたい。

今年の夏、寄贈の申し出があった画家の別の作品を実見するために、猛暑の中、筆者は電車に乗ってつごう3回ほど現地に向かった。途中片町線に乗り換える。といっても関西では「片町線」という路線名はほとんど使われず、愛称の「学研都市線」で呼ばれている。片町というのはこの路線の小さな終点で、ちょうど筆者が兵庫の美術館に勤めはじめた年に地下化され、駅名は改称されターミナルは廃止となった。このことをまだ覚えている人々が果たしてどのくらいいるのだろうか。金山展の一部で、インフラの整備と画家との関連性の有無に触れた筆者にとって、取るに足らないこのことが妙に印象に残った。この時に調査した画家の作品が、結局当館に収蔵されることがかなわなかったことも一因かもしれない。

美術館で作品を収蔵していくということは、今後長らくその作品の処遇に関わるということもあり、より重い責務を負っているように感じる。滅多にない購入はさておき、一年に数回はあろう寄贈の申し出のすべてを受け入れられるわけではなく、むしろほとんどをお断りしているのが現状である。辛うじて作品調査にこぎつけた際にも、複数の作品が対象となった場合にはその画家の作風や制作年代、作品の物理的な状態などを総合的に判断し、ごく少数の良作を取捨選択し会議にはかかる。会議にはかったとしてもすべての作品の収蔵が了承されるわけではなく、さらにその一部、あるいはその画家の作品収蔵そのものの可否にまで立ち返って協議されることもある。難関をクリアしめでたく作品が収蔵された暁には何とも言いえない達成感があるが、そうした機会は生涯に何度もあるわけではなく、多く

は収蔵がかなわず涙を呑むことがほとんどだ。展覧会の企画と同じくらい、学芸員という仕事の醍醐味のひとつであるとも言えよう。その分、美術館の顔ともいべきコレクションを形成するという重い責務にもつながる。

以前当館に在籍していた学芸員から、コレクションにまつわる次のような話を聞いたことがある。バーゼルにあるココシュカの《風の花嫁》の前で何時間も佇み鑑賞した、ある人物の話である。その人物は《風の花嫁》を見るためだけにバーゼルを訪れたというのである。確か父親か夫か、大事な人と一緒に作品を鑑賞したのがきっかけだったかと記憶している。小さなつむじ風がひとりの人の心に吹き上がり、その一生をも決定づけることがあるのだ。ルーヴルと聞くと即座に《モナリザ》を思い起こさせるまでもなく、美術館のコレクションというのはそれほど重要性がある。

すでに挙げたように、美術館に所蔵される作品は何度もふるいをかけられ厳選されたものである。逆に言えばふるいにかからなかった無数の作品が存在する・していたということであり、それらの全容をその後のわれわれが知る術はない。すぐれた作品が継承されていることそのものを尊んでいた昔以上に、今の筆者には残されなかったものやこと、人などに妙な関心が及ぶ。むしろ残されなかったことにこそ何かしらの真実が隠されているのではないかとさえ思われる。学芸員にしても、多くの来館者数を記録した展覧会を企画し、あるいは高い評価を受けた著作をものにした方々、また大手新聞に追悼記事が掲載される方々がおり、その功績が長きにわたリクローズアップされる一方、ひっそりと鬼籍に入られた方もいる。個人的には先述のココシュカの話を語ってくれた後者の学芸員にまつわるさまざまな思い出の方が重要なのだ。しかしこのことは顧みられることがない。結果としてこの「顧みられることがない」作品や人々に微力ながら少しでも迫れば、という一念で筆者は今までやってこれたのかもしれない。

作品調査を終え、猛暑の中ふと現地近くを歩いていた時、見覚えのある緑色の路面電車に出くわした。すぐに40年以上前に地下鉄への代替として廃止された南海平野線の車輛を思い起こした。当時の新聞でよく記事に接していたので覚えていたのだ。片町線と同じく、もはや人々の記憶からこぼれ落ちそうな事実を目の当たりにし、作品収蔵のあれこれに思いを巡らせていたインフラマニアの筆者にとって、思わぬ副産物に巡り合えた瞬間だった。

（さがら・しゅうさく／当館学芸員）